管理職の部屋

日高　孝一

議事部議事課長

平成11年４月　衆議院事務局採用
　　委員部各課
平成14年８月　総務省へ出向
平成16年７月　調査局第二特別調査室
平成17年９月　委員部第五課
平成19年７月　庶務部人事課付
平成20年４月　外務省在アメリカ合衆国日本国大使館へ出向
平成23年５月　憲法審査会事務局総務課
平成23年９月　委員部調査課
平成24年12月　議長秘書
平成26年12月　委員部各課
平成30年８月　庶務部情報基盤整備室長
令和２年７月　委員部第六課長
令和３年１月　庶務部人事課長
令和５年７月　議事部議事課長

息子が将棋教室に通い始めたのを機に、自らも将棋大会に参加するようになり、今年も社会人の団体戦に参戦中。負けても負けても次の対局に挑むことで、メンタル面は鍛えられていると自負しています。

Q. 衆議院事務局に入局したきっかけは何ですか。

もともと公務員志望だったのですが、大学生のときに初めて国会議事堂を見学し、その雰囲気に感動して、この場所で仕事をしたいと思ったことがきっかけです。大学３年のときに多くの会派が党議拘束を外した臓器移植法案の採決があり、各議員の投票行動が注目されるなど、国会・政治に注目が集まることが多い中で、多くの重要議案を先に審議する衆議院で働きたいと思いました。

Q. 現在の仕事はどのようなものですか。

本会議の運営を担当する業務に就いています。本会議場に座るのは就職してから初めての経験で非常に緊張しますが、衆議院の意思を決める場に立ち会うことができることを誇りに思い、課員の皆さんと一緒に務めを果たしていきたいと思います。

Q. これまでに印象に残っている仕事を教えてください。

委員部では、意見が対立する法案の審査で激しい論戦を繰り広げていた先生方が、全会一致で成立を急いでいる法案の審査では、与野党問わず早期に成立させるべく協力された姿を目の前で見て、民主政治のあるべき姿を見たと思いました。管理職としては、人事課長として採用した皆さんを全員揃って任命式に迎えることができたこと、そして、情報基盤整備室長をしていたときに、部局横断で作ったICT活用に関するチームの取りまとめ役を任され、「衆議院におけるICT活用に関する検討調査報告書」を議院運営委員会理事会に提出したことが印象に残っています。

Q. 仕事をする上で心掛けていることは何ですか。

まずは、自分自身がその仕事を楽しむことです。論語に「これを知る者はこれを好む者に如かず。これを好む者はこれを楽しむ者に如かず。」という言葉がありますが、仕事の中に楽しみを見つけられると、その仕事を好きになれますし、仕事に対する理解も深まると思います。これに加えて、管理職になってからは、面談などを通じて課員、室員の皆さんに気持ちよく仕事をしていただける環境づくりを心掛けています。職場は一日の３分の１以上を過ごす場所ですので、そこで気持ちよく仕事をしていただくことが、職員の皆さんの充実した生活につながっていくと考えています。

Q. 衆議院事務局の魅力は何だと思いますか。

大きく二つあると思います。一つは、政治の動きを間近に感じることができ、政治の現場に携わることができることです。私自身も働き方改革の法案を審査した委員会を担当しました。注目を浴びる法律案の審査を行う際には、緊張感もありますが、このようにして政治が動くのだということを体感できます。これは他の職場ではなかなか体験できないものではないかと思います。もう一つは、衆議院事務局の業務が多岐にわたっているということです。主権者たる国民から選挙を通じて負託を受けた議員、全体としての衆議院の活動を支える業務を行っている衆議院事務局には、多種多様な業務があります。就職の時点で自分の得意分野、専門分野を決めかねている方も多いと思いますが、働きながら自分に合う分野、業務を見つけられるというのも衆議院事務局の魅力の一つだと思います。

Q. この時代に、衆議院事務局にとって重要なことは何であると考えますか。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大やデジタル技術の格段の進歩といった社会の変化、未経験の新しい事態にどのように対応していくかということが重要になります。衆議院には先例集というものがあり、過去の積み重ねが非常に大切にされます。過去にない事態が起きたときには、過去の取扱いと調和を図りながら、新たな対応をすることが問われるわけですが、経験を積んだ職員の知識・知恵と若い職員の新しい感覚の融合によって、職員一丸となって対応を考えていけるとよいと思います。

Q. 人事課長経験も踏まえ、衆議院事務局を目指す受験生へのメッセージをお願いします。

衆議院事務局は、議院、議員の活動を支えるため、様々な形で議員にサービスを提供しています。より良いサービスを提供するためには、相手の話を正確に理解するための「聞く力」と、自分の考えを相手に理解してもらうための「話す力」が必要で、コミュニケーション能力はずっと磨いていかなければならないと思います。他方、多種多様な業務があり、多くの部署を経験することができますので、仕事をしながら自分の適性に合った業務を見つけることができます。民主主義の現場に立ちたいと思ってくださる皆さんはもちろんのこと、人を支えることに喜びを見いだす皆さん、現時点で自分の専門分野が決めきれない皆さんにもぜひ衆議院事務局で自分の可能性を試してほしいと思っています。